

# 感いの先に

人生折り返しからの再生 5

当時、責任ある立場にあった伊藤さんは、帰宅が深夜、未明になることもしばしば。入浴中に眠ってしまうこともあり、妻からは「体を壊す前に辞められないの」とも言われていた。清水さんと語り合ううちに、パソコンを使って障害者支援をするNPO法人設立という構想が浮かんできた。

パソコンの普及で印刷の受注も減り、職場内がぎくしゃくしてきたことも実感していた。このまま、ここにどうもつていいのー。清水さん、

## 職場の仲間と障害者支援のNPO設立

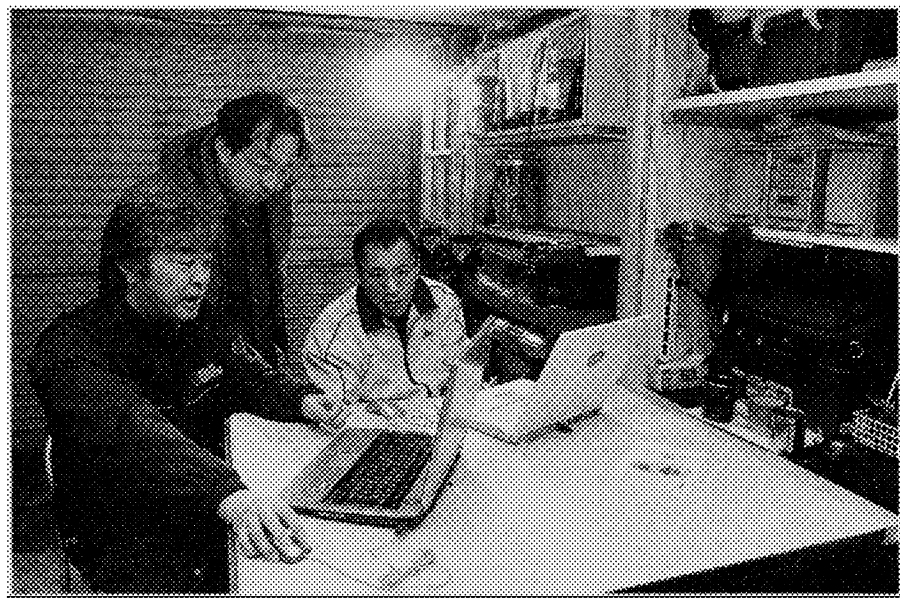
二年前の冬、当時長野市の印刷工場に勤めていた清水雄二さん(四三)は、時々職場を抜け出してペランタでタバコを吸っていた。「つらそうだな」「辞めるんじゃないか」。周囲は心配した。上司だった伊藤豊さん(四八)が話相手になった。

清水さんは十七歳の時に事故で下半身不随になり車いす生活に。多くの障害者が働くこの工場に勤めて二十年近く。待遇面の不満に加え、自分の体験を生かして「もっと多くの人にハンディをマイナスとせず、プラスとして生きていかれる支援や情報発信をしたいんだ」と夢を語った。

# 想像つかぬ人生面白さ

一カ月我慢しよう。家族にも話さないといけないので、時間をくれ」と引き止めた。二人で話していると「なんかおもしろい話あるの」と顔を出したのが関俊宏さん(四三)。

今活動の中心は、障害者をつながる仕事としては同じ。三人は二〇〇三年初夏、相を中心としたIT弱者へのパソコンサポートや企業のホームページの製作。自らのホームページ( <http://w2.a-vis.ne.jp/~npo-aan/> )では、長野市内の電器店のバ



真剣なまなざしでホームページの相談をする伊藤さん(左)関さん(中央)清水さん。仕事の合間には3人でラジコンカーレースに興じる。

リアフリー度も紹介している。「調子が悪くなった」という依頼を受けて出向き、ハード、ソフトも含めた修理や調整を行う。仕事が片付いても「お茶入れるから、話聞いてよ」というお客さんが多く、「お金をとれないことが多くて……」伊藤さんは苦笑する。両親、妻、二人の娘と暮らす伊藤さんは「収入を考えたら、こんな決断はできなかった」。父親が住職を務める自宅の寺の副住職でもあるが、その収入はわずか。工場を辞めるのと前後して、妻が働き始めた。「障害者への支援に

三倍」と笑う。電器店で週五日アルバイトをする。清水さんは「遊ぶお金がなくなってきたけど、まあそれもいいか」。仲間がいたからこそ決断できた。

「こんなはずじゃなかった」ことは、事務所を借りられなかったことだ。車いす用のトイレがある事務所がなく、「改築するなら、返す時には元に戻してください」と言われ頓挫した。やむをえず、伊藤さんの自宅の車庫に折り畳み机を並べているが、コンクリート敷きで冬は底冷えがする。自宅でパソコンを使った仕事を発注できる態勢にするのが目標だ。「一緒に働きたい、という相談もあります。だから、後戻りはできないんです」組織の中にいたら、先は見えていた。「五年後の自分が見えているような生活をするより、これから想像つかない人生は面白い」と関さん。お金は大変だけれど、ラジコンの中では笑いが絶えない。(おわり)